

## I-C-17 成人型アトピー性皮膚炎に対する漢方清熱剤の効果

富山医科薬科大学皮膚科学教室

○関 太輔、井田 充、小沼博義、豊田雅彦、諸橋正昭

【緒言】アトピー性皮膚炎は一般に乳幼児期に発症し、増悪と寛解を繰り返しながら慢性に経過する難治性皮膚疾患である。本症の特長のひとつとして、年齢による症状の変化がり、乳幼児期、学童期、思春期および成人期により特徴的な臨床像を呈す。最近では思春期に発症して成人型に移行するものや、成人期発症例なども増加傾向にある。思春期以降に見られる成人型アトピー性皮膚炎では皮疹が広範囲に分布し、特に顔面や頸部では紅斑や落屑が強く、顔面紅皮症型と表現されることもあり、種々の治療に抵抗することが多い。われわれは成人型アトピー性皮膚炎に対し、清熱剤である白虎加人参湯あるいは治頭瘡一方を用いた漢方内服療法を併用し、良好なコントロールを得ているので報告する。

【対象および方法】当科外来通院中の患者のうち、成人型アトピー性皮膚炎と診断された患者22人を対象とした。成人型アトピー性皮膚炎の診断は皮疹の分布、特に顔面および頸部の特徴的な紅斑をもとに行なった。基本的には白虎加人参湯を第1選択とし、投与2週後も効果が認められない場合には治頭瘡一方に変更した。ただし湿潤傾向の強い症例では治頭瘡一方を第1選択とした。漢方薬は患者の希望によりエキス剤または煎液を用いたが、エキス剤の場合は通常量の倍量投与とした。併用薬剤は原則として非ステロイド外用剤を用い、不十分な場合に限りweakに属すステロイド外用剤を一時的に併用した。また掻痒の激しい症例では短期間抗アレルギー剤の内服を併用した。原則として2週毎に紅斑、丘疹、落屑などの皮疹の状態および掻痒感や皮膚の乾燥状態を観察し、併用薬剤や投与期間を総合して有用性を“有用”、“やや有用”、“なし”の3段階で評価した。

【結果】多くの症例では治療開始2週後より臨床症状の改善が見られ、総合判定による有用性では、“有用”12例、“やや有用”6例、“なし”4例であった。前医においてステロイド外用剤の処方を受けていた患者では効果発現までの期間が長い傾向があった。副作用は認められなかった。

【考案】アトピー性皮膚炎、特にその成人型は難治性で、しかも皮疹が顔面や頸部に好発するため、ともするとステロイド外用剤の連用により、酒皰様皮膚炎などの副作用を併発しやすい。白虎加人参湯あるいは治頭瘡一方を用いた漢方内服療法は、多くの場合非ステロイド外用剤のみでコントロールできるため、副作用もなく優れた併用療法であると考えられた。